

《7月例会報告》

我々は日々
のぼり、おりをしている
それをもう一度
再認識
したい

三段階連関理論の日常化

座談から

「気付き」論争

今回の「気付き」の問題提起は、長谷川さんが、前回の会報15号の年報原稿の紹介コメントで、三段階連関理論を安易に物まねしてはいけないのではないだろうか、というやや自嘲的に語ったことから始まった。

全面研のメンバーならば、少なからず三段階連関理論を日常の中で応用できないかと考えるだろう。現に長谷川さんは、「生活」という対象を中間段階において考えているようだ。ところがそのポジションが意心地が悪いことに気付く。「生活」には感性的な側面が多く、認識の第I段階ではないかと自問する。このような迷いが、「学ぶ」(learn)や「遊び」などにも派生して

降りかかる。あるときはI段階だったものが、またあるときにはII段階ではなかったかというのぼり・おりの揺れは、その前後の段階に何を持ってくるかによって異なってしまうのだ。長谷川さんの言葉で言うところの「語感的感受性」によって揺れるのである。この印象は哲学的であり形而上学的でもある。

さて、ここに積年の課題でもある「気付く」が登場してさらにややこしくなる。気付くの問題提起は、植垣さんからであった。

看護学校で「気付く」べきときに気付かない若い看護生徒にどうしたら気付かせたらいいいのか、という切迫した看護の先生方からの質問に対して、植垣さんは、気付く→心づく→考えつくという三段階の流れを示したのだが、長谷川さんはどうして気付くが第I段階なのか、と疑問を呈したのである。そこには看護の現場でのみ適応する認識論では不十分ではないかという問題意識がある。

つまり三段階連関理論を、病室で患者のベットにあるコードが垂れてしまって危ないと気付くか気付かないかという状況の中で早く片付けるよう考えつくようにしたいという思いに応用できるか、それを概念化とっていいのだろうかという問題提起だといえる。

さらに植垣さんが、かつて教室の子供たちにそうじをさせるときに「感覚的指導→表象的指導→概念的指導」と指導の段階を形づくったという例をあげ、腑に落ちたとはいえなかったという思いを紹介したが、これも看護の場面とよく似ているといえるだろう。

三段観連関理論を日常や自分のフィールドの中でどのように生かすかはさまざまな試みがあるが、武田さんの読解論である『推敲読み』で論理的思考を育てる(2012年報所収)にも認識論が応用されようとしている。武田さん原稿にある「主観読み」「客観読み」「批評読み」の流れは逆ではないかという植垣さんの指摘には、武田さん自身が今回ののぼりおりの論議を経て納得した様子であった。

かつて庄司先生は、植垣さんに三段階連関理論はあくまでも認識の場面でのみ当てはまると言われたそうだが、では認識とは何なのか、あらためて自問してみる必要がある。少なくとも対象に対する認識とは自覚的な思考の動きであるはずだ。合点がいくということが含まれていなくてはならないだろう。

日本人は概念化が苦手か

後半の座談では「気付く」から「心づく」や「心付け」など心の問題が出てきて、な

かなか收拾がつかなかった。それは、心は感性的側面（Ⅰ段階）もあり、抽象的側面（Ⅲ段階）もあるからだ。

西洋的な哲学からいうと日本人の思考はなんとなく感性的でぼんやりとしているイメージがある。それを表すように日本人は体で考える面がある（長谷川）、日本人は概念づくりが弱い（山田）という指摘に対して庄司先生は、日本人にも概念はありますよ、それを概念とっていいだけです、と切り返した。ここはこの例会の重要ポイントであった。

日本人の概念化の例として庄司先生は、「名前」を取り上げた。名前は名付けであり、その言葉は抽象的である。感性的な心の動きを抽象概念によって登り降りする場面の例として看護師と患者の交流をあげたのは、その交流が命に関わる真剣なものだからであろう。それはあくまでも意識的であり、ときに無意識に流れる日常の側面と一線を画している。

のぼりおりを説明をする庄司先生は、机に隠れたり半身を出したりしながら我々に身を以て認識を伝えようとした。第一印象の感覚的認識、実像が消えた中でイメージする表象的認識、我々は普通そこを行ったり来たりしている。しかし意識化される中でやがて、「庄司和晃」という像を作り上げる。庄司和晃という名前で概念化が図られる。

庄司先生の紹介する日常の中で遭遇するコメツキムシ、回転虫、角消しゴムのエピソードがおもしろい。そして我々の思考も第Ⅲ段階へのぼる。すなわち、認識がなされなければ名付け（概念化）はできないんだ…、名前から人がどのように概念化したかが分かるんだな…、などと。

庄司先生の話聞き、我々の概念観には

西洋学問の手垢がついてしまっているかもしれない。あるいは、西洋の学問・芸術で我々は無意識に思考をしているのかもしれないと考えさせられた。日常の中にある思考の試行錯誤の中から我々の先祖は、概念を築いてきたに違いない。

認識の「のぼり」、「おり」の新展開 ～ストラテジー論

庄司 和晃

もうすでにのぼりおりの一部を「名付け」としたことを前の文章で紹介したが、Ⅲ段階目の「概念化」には「名付け」のほかにも「定義づけ」「カタイ言葉にする」「言い切る」「とは」思考法そして「認識の「三段階」の発見」と5つのカテゴリーがあることが分かる。

言うまでもなく庄司認識論は板倉聖宣氏共同作業である仮説実験授業の中から生まれたわけだが、そこには科学に対する熱い思いがあったという。

「科学は信用だ」という庄司先生と「科学は社会的認識だ」という板倉聖宣氏の概念化は同根だ。篠原さんが今回の教育実験でも見せているように、クラス全員の作品を提示するというのは、自分の都合のいいデータだけを提示するのと違い、理論がどの程度検証されたかが客観的に分かるという大切な研究手法である。教員の教育実践記録にありがちな成功例だけを示して都合の悪いものを取り上げない記録とは一線を画すのはいうまでもない。

これは「〇〇大学出身」と標榜して、学歴で勝負しがちな学問研究世界にあって独自の理念を築いた三浦つとむの学問方法論

に裏付けされたものだと庄司先生は語気を強くして語った。

一方で、概念の構築にはさまざまなアプローチがあったと庄司先生はいう。「理論があるから具体的なものはいらない」といった時枝誠記や自分の仮説を「デザイン」と表現した今西錦司の独自の世界がそこにある。そして庄司認識論でも、最後の「認識の「三段階」の発見」にあるように、同じ対象物でも「とは思考法」でイメージした認識が異なることによってさまざまな概念が生まれることもここで記しておきたい。

長年、日常の中で常に三段階連関理論を意識してきたという庄司先生は、対象をさまざまな目で見ると複眼思考を持っているように見える。人の言質のウラを読む、と先生は時折いうが、それは相手をその言葉や様子からも概念化していることであり、また相手にもさまざまな多様な面があることを認識しているということではないだろうか。

なお表題のストラテラジー（新戦略）という思いは、とても重要な切り口ではないかと思った。それは非権力者である我々が権力を手玉に取り、見せかけよりも中身で勝負というスタンスで立ち向かう心意気だからだ。権力に対峙し、相対化することこそ自立的に生きる道筋につながるからである。

《今回の庄司先生からの配布資料一覧》

- ・認識の「のぼりおり」論の新展開 2013.7.6
- ・絵ときコトワザ（日赤研修Ⅰ）2013.4.30
- ・絵ときコトワザ（社保看）2013.4.13
- ・ポラリス看一年生との絵ときコトワザ
2013.4.13

「絵解きコトワザ」その1

それは下りか横ばいか

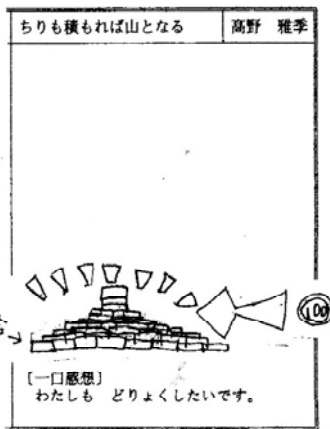
篠原 賢明

篠原さんは数少なくなった現役教員で、毎回例会に小学校での授業実験を紹介してくれる貴重な存在となっている。今回は「絵ときコトワザ」の実験授業だ。

小学校2年生の篠原さんのクラスでは、子どもたち

が「江戸いろはかるた」のい～ぬまでのコトワザを任意に選んで絵にしてみた。

言うまでもなくコト



ワザは表象認識として重要な意味を持つ。そのコトワザを絵にするという試みは、結果的にコトワザをどのように理解したかを物語ることになる。

当日配られた庄司先生の絵ときコトワザのレジュメでは、絵ときコトワザの表れ方として

A：コトワザの文字のイメージを絵にする。（「花より団子」のようにオモテを絵にする。）

B：コトワザの意味のイメージを絵にする。（「論より証拠」のように裏の意味を絵にする。）

の2つに分類されている。子どもたちにとって絵を描くことは文章を書くことよりも易しい。その絵ができBのように裏がつか

めていればコトワザの認識がより深まった



ことになっていくのである。

さて、今回問題になったのは、この小学2年生の絵ときが第II段階における「横ばい」な

のか「おり」なのかということ。「横ばい」は、並列の発展系でいくつもの事例を提示することができることを指し、「おり」は具体的な事象や経験を示すものだ（上のBに当てはまる）。庄司先生のレジュメには横ばいと書いてあるのだが、植垣さんから子どもたちの作品が自らの日常を語っているから下りではないかという見解が出た。

7、8歳の子どもたちの思考は、無意識で直感的で「のぼり」「おり」「横ばい」の意識はないのだが、子どもたちに提示した指導者にはどの段階の思考の動きなのかを把握しておく必要がある。

長谷川さんからは、おりながらのぼっているのではという見解が出たり、山田さんからは、子どもたちが悪戦苦闘しながらコトワザをつかもうとしている（主におりの視点から）、などと意見が出たが、庄司先生が繰り返すことによって深まっていくんですよ、という発言が出て納得したかたちとなった。

やまとことばと百人一首と現代

山田 学

山田さんの論文の要素は多岐にわたる。やまとことばの音韻の研究は、日本語翻訳のための重要な構造研究であり、それはすでにインターナショナルな位置にあるという。そこから次世代生命技術(?)に展開されるのだが、その過程で核廃棄物の処理などの震災後問題も解決しなくてならない。NTT日本語翻訳の研究者においては時枝誠記と三浦つとむという二人の言語学者が参考になるという。そして、三浦つとむから庄司和晃へとつながる思想の流れを山田さんは着目しているのである。

NTTの機械翻訳のための研究機関であるLACE研究会が、日本語の研究の重要な要素としてやまとことばの音韻に注目したことが山田さんから紹介された。ここではやまとことばを駆使した「百人一首」に注目されている。

やまとことばを意識する山田さんの文章は旧仮名遣いにこだわる。かつて柳田國男も日本語の濁音はきれいとはいえないと書いていたが、山田さんも「いう」ではなく「いふ」なんですよね、「いう」ではちょっと重すぎるらしい、などどその微妙さを語っていた。

旧仮名遣いで思い出すのは『敗戦後論』（加藤典洋）だ。大岡昇平、太宰治らが戦後あえて旧仮名遣いで文章を書くという行為に出た背景を見事に論じている。

さて、山田さんは『認識の三段階連関理論』の中の「日本の「雪月花」の語るもの」(p168-9)を引用して論じている。

庄司先生は、ここで「雪月花」「花鳥風月」「山川草木」などの認識が単に心情的なものではなく、表象的思想として昇華しているとして見直すべきだといっている。日本人はただ月を見て詠嘆しているのではない。月の向こうに現象的概念を持って思想していた。我々の先祖は日常の中の具体を単に具体に終わらせることなく表象段階にのぼらせていたのであった。

山田さんの論文はなかなかつかみにくい重層的な内容であったが、いろいろなことに気付かされた論文でもあった。

ロックのノリで

コトワザDEEP!

伊東 峻

道岡さんの同僚で、さまざまな仕事遍歴を経て教員になった伊東君は、なかなか懐の深い人物だ。例会では、率直な言動で好感を持たれているといっている。だいたいお酒も余り飲まないのに、必ず全面研第2部に参加し、まるで飲んでいるようにふるまう意気込みは買わなければいけないだろう。(立派!)

さて、その伊東君の小学校6年生のクラスでもいよいよコトワザの授業が始まった。道岡さんの仕掛けでもあるらしい。レジュメを見るとコトワザを介してにぎやかな教室の雰囲気伝わってくる。しかし例会では取り上げたコトワザについての意見が飛び交った。

「まず情けない話「秋の日はつるべ落とし」の意味をよく知らなかった児童たち」(レジュメ本文) …。

歴史への挑戦というコーナーでは、「知らぬが仏」と「猫に小判」をとりあげ、本当に存在することわざを、さらに良いことわざにしよう。という試みはいいのだが、篠原さんから「なぜ、知らぬが仏を取り上げたんですか」と聞かれると、うーん、と。

ことわざには難易度があり、イメージしやすいものや生活に身近なものでスタートするほうがいいだろう。

今回のコトワザの授業は創作コトワザだ。最初に「ウソコトワザを見破ろう」としたのは斬新で興味深い。選択肢が3つあって、

- ①トイブドールにティファニーダイヤモンド
- ②ミイラ取りがミイラになる
- ③冷たい石の上でも長い年月座っていれば、暖かく感じられる

の中から見破るのだが、このアプローチが爆笑もので、伊東君ならではだろう。植垣さんというところのロックのノリで授業をしている感じがレジュメからも説明からも伝わってくる。つまり、クラスがハイになっている感じ。

さて創作コトワザを展開するには「まづ型はめコトワザ」から入るといいだろう。そうして慣れてくると「知らぬが仏」のような裏の意味を深めるものになる。最近の「深いなあ」という軽口から、DEEPと題したのだろうが、子どもたちにも「深いなあ」と思わせるコトワザの授業を期待したい。

→100MBへ現在準備中

・今まで尾崎さんが文章を探し編集してきたトップを飾るコラムはなかなかの難事業だったようである。そこでコラムの原稿を新たに作成し尾崎さんに送って下さいとのこと。担当は次のメンバー（HPを持っていないメンバーで）ですが、それ以外の方でも原稿を送って下さい。

（庄司和晃、植垣一彦、向井吉人、長谷川孝、篠原賢明、徳永忠雄）

・庄司先生の手書きの原稿がかなり充実しています。→「手書きでみる庄司和晃の仕事」参照

人間ばかり主義では スミレたちがさびしがる



科
近
庄
お

コンテンツ

- 全面教育学とは
- 認識の三段階関連理論
- 研究会通信 (しんらばんしょう)
- 『年報』総目次 (作成中)
- 手がきで見る 庄司和晃の仕事
- 庄司和晃の名言
- コラム一覧
- 総目次2012
- 2013年1~7月
- メンデルと朝顔
- 山びこ学校も遠く*
- 弁証法的道徳教育の実践 「悟り」は・・・?

コラ.

2013.09.27 非常勤教員
不得手に帆を上げ、学校
(向井吉)

<はじめに>

5年前に定年退職してから、非常勤教員、勤務している。退職するまでの37年間、勤教員になると、<学級>という子どもか、ほかの教員とで編成される<学年>、務の軽減)なのだが、まずは給与と見合、非常勤教員の勤務は、複数の学級で特別教育委員会との契約更新があり、学校では、6年生の理科、4年生の社会と理科、10時間余りを担当している。また、担任という任務で、その学級の面倒を見ることだ。常勤の先生がインフルエンザで休んだこともある。半ばことば遊び的な表現だが、常勤教員>ではなく、<非常勤>教員だ!

HPについて

尾崎 光弘

・資料が増えてきたのでHPの増量化

常民大学東京大会のご案内

小田 富英

第28回常民大学合同研究会
研究主題：常民大学と地域文化
日時：2013.10.26(Sat).27(Sun)
場所：荒川区日暮里 ホテル ラングウッド
内容紹介：

《26日》

基調提案 小田富英

記念講演 草野滋之

「常民大学と地域文化」

ほか研究発表

《27日》

フィールドワーク

谷中墓地から上野図書館、

柳田國男『故郷七十年』ゆかりの地を巡る
＊詳細については小田さんのホームページを参照。

尾崎・徳永の

世相史研究会 近況報告

『明治大正史世相編』（以下『世相編』）を読み直す作業開始。

8月の全面研のホームページ巻頭に認識論とこの世相史編とをクロスオーバーさせた「メンデルと朝顔」（徳永）という文を書かせてもらったが、この試みを発展させて、現在の会員5人が読んできた『世相編』を何とかして現代とリンクしたいと考えて読み直し作業を始めた。

それは、柳田が「三百年前の色音論は気楽であったが、眼に見耳に聞いたものを重んじた態度だけはよい。改めていま一度、これを昭和の最も複雑なる新世相の上に、試みて見るのはいかがであろうか。」（『世相編』）をうけたもので、文中の「昭和」を「平成」に置き換えたかどうかという試みである。

『世相編』は、柳田自身が失敗作だと自序で述べているが、それはまたある種の戦略的謙遜でしかない和我々は分析している。そこで、

「歴史は他人の家の事蹟を説くものだ、という考えをやめなければなるまい。人は問題によって他人にもなれば、また仲間の一人にもなるので…純然たる彼らの事件とうものは、実際には非常に少ないのである。」（『世相編』）を読み取り、新たな歴史観をつかみ、新たな共同意識を模索したいと考えている。

《広告》

マリオ書房 在庫案内

古書取り扱い中

◆送料のみの古書

- ・「サンカとともに大地に生きる」
(清水精一 河出書房新社)
- ・「地名の古代史」
(谷川健一、金達寿 河出書房新社)
- ・「総合民俗語彙」第一巻～第四巻
(柳田國男監修 民俗学研究所 平凡社)
- ・「日枝阿礼の縄文語」(辻本政晴 批評社)
- ・「ことわざ学入門」(ことわざ研究会 遊戯社)
- ・「四天王寺の鷹」(谷川健一 河出書房新社)

◆有料の古書

- ・「社会科のための民俗学」
(桜井徳太郎 東京法令出版)
- ・「炭焼き長者黄金の謎」
炭焼き小五郎伝説と柳田國男
(角田 彰男 原書房)

ご希望の方は店主まで。連絡先 090-8721-5517

【当日参加者】

庄司、武田、植垣、長谷川、尾崎、篠原、山田、
伊東、徳永 編集・文責：徳永

小学校の下級生から判断力をみがいてやるのが大切だ。
ごく機械的なことから始めていい。

柳田 國男

歴史学者の磯田道史が古今の98人の日本人をとりあげ、思索に富んだ言葉を取り上げた新潮新書『日本人の叡智』（2011）の中に、上記の柳田國男の言葉が登場する。出典は雑誌『展望』（1949.1）での川島武宣（法学者）との座談。以下は座談における柳田の発言。

「…どうかしてもう少し賢くしなければなりませんね。あなた方についてゆけるように、ある程度見透しができるように教育しなければいけませんね。どういやったらいいか難しい問題ですね。

まず小学校の下級生から判断力をみがいてやるのが大切だが、私はごく機械的なことから始めていいと思いますね。判断力は選択だから、こつちとこつちがいいかと言わせてみて中には雷同する者もありますが、比較させてみれば何時でも正邪の判断が出来るような癖をつける。今の子どもは西洋の平凡児童と比べても劣っていると思う。人が何と見回す者が多くなって個人で判断することが少なくなっている。あれは教員の一種の技術でできると思う。しかし、こう判断しろということを一ぺんに教えるということはメチャだと思う。できないかもしれないが、できるだけ公平な、一人で判断できるように導くということが教育の一番の理想だと思いますね。

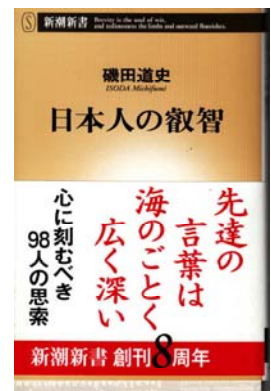
…今は、軍事費が無くなったのですからね。それに当てていたものの少なくとも半分は教育に使わなければなりませんね。今はそんなことをいっても夢だけれども。…」

（『柳田國男対談集』ちくま叢書 26 「婚姻と家の問題」より）

再び新潮新書『日本人の叡智』に戻るとこんな文章がある。

「…おそらく柳田の念頭には薩摩藩の郷中教育ごちゆうがあった。薩摩には「詮議」といって児童の判断力を鍛える教育方法があった。たとえば「殿様の用事で急ぐ場合、早駕籠でも間に合わぬときはどうするか」と子どもに問い、答えさせる。

普段から、仮定の質問に答え、対処法を考える訓練をしていた。これによりいざというときの処理判断を誤らせない。西郷隆盛も大久保利通もこの教育方法で育った。幕末の混乱期、最も見事な政局判断を見せたのは、彼ら薩摩藩の面々であった。



こう見るとディベートも日本にあったのかもしれないと思ったり…。（と）

しんらばんしょう

全面教育学研究会通信
2013. 10.1 No.15

《7月例会報告》

我々は日々
のぼり、おりをしている
それをもう一度
再認識
したい

